

特集

コウノトリと共に生きるまちづくり

* 三笠孔子¹

Community development to live in harmony with the Oriental White Stork

* Yoshiko Mikasa¹

¹ The Oriental White Stork and Human Coexistence Division, the Oriental White Stork and Human Coexistence Department, Toyoka City Municipal Government, 2-4, Chuo-cho, Toyooka, Hyogo Pref. 668-0866, Japan

* E-mail: yoshiko-mikasa@city.toyooka.lg.jp

「コウノトリと共に生きるまちづくり」について、豊岡市の取組みを紹介する。

豊岡での野生復帰に向けた取り組みは、約半世紀にも及ぶ長い時間がかかった。1999年に県立コウノトリの郷公園が設立され、豊岡では様々な立場の人たちが協力、連携しながら試験放鳥の実現を目指して取り組んできた。コウノトリの人工飼育、人工繁殖は、コウノトリの郷公園が実施されている。併設されている兵庫県立大学自然・環境科学研究所では、コウノトリの生態等についての研究が行われている。

2005年に試験放鳥することとなったが、放鳥するということは、野外でコウノトリが餌をとって生きていけるようにしなくてはいけない。その環境をつくるためには、農業者をはじめ市民の協力が必要だ。専門家の方々の協力も必要だ。行政も関わり、地域全体で取り組む必要があった。関係者が情報を共有し、それぞれの立場で取り組むために、兵庫県但馬県民局に事務局を置く「コウノトリ野生復帰推進連絡協議会」が2003年に設置され、連携して取り組んできた。また、地域外の企業や、コウノトリファンクラブ、研究者などの協力もあり、様々な人々が関わって野生復帰は実現した。そして、世界にもほかに例のない人里での野生復帰を地域全体で成し遂げてきたことに対して、高い評価をしていただいていることは、豊岡の誇りである。

豊岡市では、「コウノトリをシンボル」としたまちづくりを進めている。その基本となる考え方が「コウノトリ

と共に生きるまちづくりのための環境基本条例」の前文に示されている。「コウノトリの生息を支える豊かな自然とコウノトリを暮らしの中に受け入れる文化こそが、人にとってすばらしい環境である」そして、その「環境を将来の世代につないでいく」ことが今を生活している私たちの務めであるということである。

この考え方のもとに、豊岡市では、総合計画で「コウノトリ悠然と舞うふるさと 豊岡」を目指すまちの姿として掲げ、具体的な計画、戦略などを策定し、施策を進めている。具体的には、まず、最初に、農業を見直すことから始まった。かつて、コウノトリは、豊岡盆地の水田を餌場に使っていたことから、田んぼに餌となる生きものを増やす必要があった。

かつての豊岡盆地一帯は、いわゆる「じる田」といわれる湿田だった。しかし、農業の効率化のために、圃場整備を実施し、田んぼは乾田となっていた。水路と田んぼには段差ができ、魚が遡上できなくなっていた。そこで、兵庫県豊岡土地改良事務所が魚道を設置し、魚が遡上できるようにした。今では市内に110か所の魚道が設置されている。また、耕作しない田んぼは、ビオトープ水田にし、耕作田も冬に水を抜かず年の中田んぼに生きものが生息できるようにした。これに取り組む場合は、市から管理費用を委託する制度を設けている。ビオトープ水田は、小学校区に1つは設置し、子どもたちの環境学習の場にできればと思っている。今年も15校以上の学校で、近くのビオトープや田んぼを借りて、生きもの調査を実施した。

コウノトリの絶滅の原因の1つが、農薬の影響だったことから、農薬を使うことを見直す必要もあった。そこで、兵庫県豊岡農業改良普及センターでは「コウノトリ育む農法」(以下、育む農法)という栽培技術をまとめ、普及を図った。かつては、農家の方々にとって、コウノトリは田んぼの稲を踏み荒らす害鳥として嫌われていた。放鳥の計画を進めようとした当初、農家の方々からは、反対の意見がほとんどだったと聞いているが、郷公園周辺の一部の農家の方々の理解が得られたことで、農薬を使わない稲づくりが始まった。最近では、コウノトリを害鳥だという声はほとんど聞かれなくなった。反対に、自分の田んぼのコウノトリが降りてくれることを

¹ 豊岡市コウノトリ共生部コウノトリ共生課
668-8666 兵庫県豊岡市中央町2-4

* E-mail: yoshiko-mikasa@city.toyooka.lg.jp

願って、育む農法に取り組んでいる方が増えたのではないかと感じている。

育む農法は、コウノトリの餌となる生きものを増やすことだけでなく、農薬を使わないで作ったお米は、人間の体にとってもより安全で安心なものであることから、食の安心安全を求める消費者の方々にも受け入れられ、大手スーパーでも取り扱われるようになった。現在、全国約500店舗で販売されるようになった。このお米は、安全安心な上に、コウノトリの生息地保全にもつながるといふ付加価値も加わり、農協の買い取り価格は普通のお米に比べ、減農薬で1.2倍、無農薬で1.5倍と高く取引されているが、2011年米は、7月には完売したという。通常の米作りに比べ、手間はかかるが、高い値段で売れば、農家の経営も成り立ち、栽培面積も増やせる。面積が増えればコウノトリも安定して餌が得られ、繁殖が進んでも安心できる。今や野外に約60羽のコウノトリが暮らしている。このコウノトリが安定して餌を得るためには、生きものの生息する田んぼがどのくらい必要かについては、兵庫県立コウノトリの郷公園が研究している。市は、育むお米の販売促進のために農協と連携してPRを行っている。お米の流通商社に職員を派遣してもいる。研究者、農家、農協、行政、この連携ができることが豊岡の強みだ。また、豊岡市の学校給食では、週5日市内産のお米を使っているが、そのうち、2日は育むお米を使っている。育むお米の消費拡大も進み、育む農法の栽培面積は増えて今年度は、251 haとなっている。

国土交通省では、2005年に「円山川水系自然再生計画」を策定し、約100年前にくらべ30%以下に減った河川内の湿地面積を元に戻そうとしている。例えば、堀川橋の上流では、河川敷の一部を工事により湿地として自然再生している。玄武洞付近の中州であるひのそ島は、当初計画では、治水のために全て削除する予定だったが、計画を変更し、半分残している。円山川の湿地面積は、現在125 haになった。

円山川の下流域、城崎温泉の対岸に位置する戸島地区の田んぼは「嫁殺しの田んぼ」と言われるほど、大変な「じり田」だった。30年来の悲願でもあった田んぼの圃場整備（乾田化）を進めていた2004年10月、台風23号で被害を受け、工事がストップした。そこに野生のコウノトリ「ハチゴロウ」が舞い降りて、餌場として毎日のように利用したことから、地元住民が英断し、工事がストップしていた田んぼの一部をそのまま湿地として残すことになった。用地は豊岡市が買収し、工事は兵庫県が土地改良事業で実施し、完成後は市が譲渡を受け、現在は「ハチゴロウの戸島湿地」としてNPOが管理をしている。

河川敷の水田を大規模な湿地として整備する動きも進んでいる。出石川の下流、加陽地区の堤外田だったところだが、耕作放棄田も増えていたところに台風23号で壊滅的となった。そこで、国土交通省が自然再生のために用地買収を行い、湿地として整備することになり、現在工事中である。

そのほかにも、コウノトリ野生復帰をささえるために様々な活動が行われている。古くは、昭和30年代には、「どじょう1匹運動」に多くの市民が協力した。現在では、NPO法人コウノトリ湿地ネットのサポートによるピオトープ整備（湿地ネットは、ハチゴロウの戸島湿地の指定管理者）、市の小さな自然再生活動支援助成制度（2011年度～）を活用した地域の耕作放棄地の整備、将来、コウノトリが人工巣塔ではなく、かつてのように松に営巣できるようにとボランティアや子どもたちによるアカマツ林整備やひょうご元気松の植樹、NPOコウノトリ市民研究所による田んぼの学校などが行われている。

企業のCSR活動による里山保全や湿地作業などを行っていただくケースも増えている。単なる自然環境保全ということだけでなく、コウノトリの生息地保全という具体的なわかりやすい目的があることで、理解が得られやすいということがあると思う。その結果、交流人口の増加にもつながる。

日本海に面した半農半漁の集落「田結」地区は、2006年には、稲作をされる人がいなくなり、集落の奥に広がる田んぼは、耕作放棄地となってしまっていた。そこに、2008年、1羽のコウノトリが舞い降りたことから、地域をあげて、自然再生に取り組まれている。今では、子どもたち、ボランティア、研究者など、いろいろな人たちが訪れるようになり、地区を案内する女性ガイドグループ「案ガールズ」まで結成されている。

このように、豊岡ではコウノトリが生きていける環境を取り戻そうと、多くの方が活動してきた。野外でのコウノトリが順調に増えていることが、その成果だと思う。そして、コウノトリが舞い降りる地域が元気になっている。野生復帰をすすめることは、地域を再生することにもつながっている。最近では、車で走っていてコウノトリを見かけることも多くなってきた。とても幸せな気持ちになる。つい先日、仕事で日高に行った帰りに、蓼川大橋の下流でコウノトリを見かけた。なにげない、いつもの風景の中にコウノトリが帰ってきている。

次に、豊岡市が取り組んでいる施策を紹介する。

コウノトリ野生復帰をテーマに豊岡盆地で自然環境などを研究する大学生等を支援している。市外の学生が豊岡に研究のために来られる場合の交通費や宿泊費用を助

成する制度である。2004年度から2011年度まで、延べ個人で37名、グループで11グループに助成を行った。

教育委員会生涯学習課では、「子どもの野生復帰大作戦」として、子どもたちが自然の中で様々な活動を体験する機会を作っている。

2007年国内の野外でコウノトリのヒナが43年ぶりに誕生した5月20日を「生きもの共生の日」として制定。市内の小学校では、近くの河川で生き物調査やコウノトリ育む農法の田植えに挑戦するなどの授業を行った。

2010年度から学校区や地域を飛び越えた子どもたちの組織として始まった「コウノトリ KIDS クラブ」。生きもの調査や無農薬での米作り、生きもの標本づくりなど、様々な学習や体験活動を行っている。地域の素晴らしさやコウノトリ、生きものに触れる活動は、次代を担う子どもたちを育てている。

他地域の子どもたちとの交流も進んでいる。トキの佐渡市、マガンの大崎市と豊岡の子どもたちの交流の場として、東京大学を借りて、「世界一田めになる学校」を3年連続で実施した。

「豊岡市環境経済戦略」は、環境を良くする取り組みをすることで、経済活動が成り立つ仕組みをつくって、地域の経済が自立し、持続可能となれば、もっと環境活動も活発化するのではないか。環境経済戦略はそのような考え方を示したもので、5つの柱を掲げて取り組んでいる。この考え方の成功事例が、コウノトリ育む農法による米作りだ。

2000年、郷公園の一角に、一般の方々にコウノトリについて理解してもらい、取り組みを啓発するために、豊岡市が「コウノトリ文化館」を整備した。コウノトリ文化館を訪れる人は、2005年の放鳥以後増加し、最近では約30万人の方に来ていただけるようになった。園内を案内するガイドの養成や、タクシーの運転手さんに語り部になっていただくという研修なども行ってきた。その効果として、慶応大学の沼教授らが発表された論文では、その経済波及効果は年間約10億円という試算がされている。

地産地消をすすめるために、地元の商品を販売する施設を市が整備し、地元の会社に運営を委託している。コ

ウノトリの郷公園の駐車場に隣接した『コウノトリ本舗』である。

そのほか、自然エネルギーの活用促進や、環境経済型企業の育成のための補助制度など、市のそれぞれの関係部署で取り組んでいる。最近の一番大きな取組みは、コウノトリの生息地となっている「円山川下流域・周辺水田」のラムサール条約湿地への登録である。

2008年に登録に向けた動きをはじめ、国、県、地元地域の同意、関係手続きを経て、2012年7月に登録されたところである。具体的な場所としては、豊岡大橋から下流の円山川、ハチゴロウの戸島湿地、楽々浦湾、田結、気比から畑上、気比の浜、桃島池などを含む周辺水田である。この登録により、豊岡が国際的に重要な場所の1つとなった。

一度は絶滅したコウノトリをもう一度野生復帰させたこと、その過程で人が手を入れることでより豊かさを増した湿地環境を作ってきたことが評価された。今後は、安定してコウノトリが生息していけるよう、環境を保全すると共に有効に活用していくという任務を国際的に負うことになったのである。

最後に、最近感動したことを紹介する。ラムサール湿地登録を記念した行事の中で、子どもたちがエリア内で様々な体験をして、宝物を見つける事業を実施した。2泊3日の最後の日、まとめた宝物は、「コウノトリ」や「オオアカウキクサ」と並んで、「昔ながらの田んぼを手入れする人々」「生き物を大切にしている人々の気持ち」など、形のあるものだけでなく、人や気持ちに関するものがあげられている。すばらしい子どもたちが育っている、豊岡の宝物だと思う。野生復帰の取組みは、確実に受け継がれていくと確信した。

以上、豊岡市で進めてきた取り組みを紹介したが、これらの取り組みは、コウノトリのためであると同時に、私たち人間のためでもある。これからもコウノトリと共に自然と人が折り合いをつけながら心豊かに暮らし、小さなまちでも世界の人々に尊敬されるまちづくりに精進していきたいと思う。

(2012年12月15日受理)